令和5・6年度 第7回高崎市公民館運営審議会 会議録

開催日時 令和7年3月5日(木) 午後1時30分から2時50分

開催場所 高崎市中央公民館 集会ホール

議題 令和7年度高崎市公民館長任命に関する意見聴取
令和5・6年度提言について
令和6年度高崎市公民館実績報告・審議
提言に関わる事例の紹介

公開・非公開区分 公開

出席委員(11人)

原徳応委員 ・ 串田昭光委員 ・ 三澤憲一委員 ・ 小高広大委員
小屋美香委員 ・ 櫻井登委員 ・ 原田和之委員 ・ 山口堅二委員
秋山美和子委員 ・ 品田佳江委員 ・ 井澤千代美委員

欠席委員(9人)

佐藤芳正委員 ・ 星野雅代委員 ・ 内田祥子委員 ・ 大河原吉明委員
小見勝栄委員 ・ 植原孝行委員 ・ 丸茂ひろみ委員 ・ 上條ちづ子委員
岡部敬子委員

成立 高崎市公民館運営審議会規則 第4条第2項による

事務局出席者

山口順子中央公民館長・川嶋昭人公民館担当部長・齋藤崇夫教育担当係長
錦部次長・江積利雄次長・千保木次長・大村政彦次長・塚越康弘次長・平石貴
文次長・伊藤俊一次長・武政文隆次長・貫井賀津夫次長・岡田清香主任主事・
古川和江行政嘱託

傍聴定員 5人

傍聴者数 0人

所管部課名 教育部高崎市中央公民館

令和5・6年度 第7回高崎市公民館運営審議会 議事録

議事

1 令和5・6年度提言について

会長： それでは、令和5・6年度提言についてです。これに関わりまして、私の方から提言についてのお話をさせていただきます。その後、提言に関わる事例の紹介といった形で進めたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。

はじめに、令和5・6年度の提言についてですが、少し経緯についてお話させていただきます。高崎市公民館運営審議会は、昨年1月の館長会議での高崎市公民館連絡協議会での承認を経まして、3月に令和5・6年度「持続可能な地域づくりの拠点としての新しい公民館としてのあり方～コロナ禍を超えて～」に関する提言を行うことに決定しました。それを受けて本提言の特徴である、コロナ禍を振り返る視点というのがありましたので、2月に各地区公民館の館長および主事を対象にアンケートを実施いたしました。その後、事務局により集約された結果、それを受けまして提言の5つの柱、それぞれの3小項目を構築するための貴重な基礎資料として、3月に設置されました専門委員会により原案の作成・検討に活用した次第であります。

そうして作成された5・6年度の提言案を7月18日、更には11月26日の審議会で審議をいただきました。各審議会でいただきましたお考え、更にはご指摘などについて、残った課題がありましたので、その都度専門委員会に持ち寄り、協議して、修正を加えてメールで提案を発信し、そしてご意見をいただきました。いただいたご意見はいくつかあったのですが、それについては微調整と判断しましたので、正副会長で協議し、提案に活かしました。そして令和7年1月30日の本審議会を開催することなく提言書が完成され、本日に至った次第です。その提言書につきましては、今お手元にあるかと思えます。

また、コロナ禍における公民館の取組状況の変化に関する調査結果などについては、今回の提言の基礎資料として添付することにしました。そうした関係で、提言書の分量が厚くなっただけではありますが、以上が、経過に関する大まかな説明でございます。最終の提言書が出来上がりましたので、この場で高崎市公民館連絡協議会長に、中央公民館長でございますけれども、この提言書をお渡しします。皆様におかれましては、どうぞよろしくお願いいたします。それではただ今より、お渡しの式を行います。

館長： ありがとうございます。

審議会委員の皆さまには大変お世話になりました。

今回の提言では、「持続可能な地域づくりの拠点としての新しい公民館の在り方～コロナ禍を越えて～」として、コロナウイルス感染症という未だかつて経験をしたことのない災害に遭遇し、諮問・答申という形ではなく、皆様方でテーマを選び、公民館へのアンケートと共に提言をいただくというスタイルでございました。専門委員の皆様には、5つの柱でわかりやすくまとめていただきました。

いただいた意見をもとに、社会の激しい変化や先行き不透明な、厳しい時代が推測される中でも、公民館活動が地域の持続可能な発展を支援するという重要な役割を果たせるよう、努力して参ります。貴重なご意見をありがとうございます。

会長： 私たちの提言でございます。具体的な内容になっておりますので、ご活用いただければ幸いです。

2 令和6年度高崎市公民館事業実績報告・審議

会長： 続きまして、令和6年度高崎市公民館事業実績報告・審議に移ります。それではよろしく願いいたします。

事務局： 令和6年度の高崎市公民館事業実績について説明させていただきます。「令和6年度高崎市公民館事業実績」の冊子をご覧ください。こちらは今年度の高崎市の公民館事業について、テーマごとに掲載した資料となります。12月末時点で各館の情報を集約し掲載しております。こちらで事業実績の報告をさせていただきますが、時間の都合上、全体の傾向や新規の事業などを中心にご説明させていただきます。

表紙を1枚おめくりいただくと目次がございます。こちらの各テーマについて事業の概要が記載されております。

まず1ページをご覧ください。中央公民館の事業について説明させていただきます。この中で新しい特徴的なものとして、ライフアップ推進事業では、「にこにこ子育て」という講座を、初めて子育てなんでもセンターを会場に行います。講座自体は来週の開催となります。

また、キャリアデザイン支援事業の中で「おうちで公民館動画配信」ということで、昨年度試験的に始めた動画の配信を本格的に実施し、今年度は約11種類30本の動画を配信します。もう上がっているものもございますし、今、編集中心のものもあります。今年度の内容的には地区公民館と協力し、地区公民館で人気

のある講座を行っている講師の動画を中心に作成しております。

2ページをご覧ください。地域づくり支援・ボランティア養成講座の中で「はじめてみようボランティア」という講座を初めて行いました。NPO・ボランティアフェスティバルという市のイベントと連携し、フェスティバルと同日に同会場である市民活動センターソシアスで講座を開催するというもので、内容的にはボランティア活動を実際に行っている人の話を聞くことを通して、ボランティア活動を始めるきっかけとなるような講座としました。さきほど挙げた「にこにこ子育て」もですが、今年度は、会場を中央公民館にこだわらず、より効果的な講座が実施できないかを検討した部分がございます。

図書ボランティア活動支援事業は、各地区公民館で図書ボランティア活動をしている方を対象に活動内容のスキルアップのために継続して講座を行っており、今年度は「あつまろう！図書ボランティア」という貸出ボランティア向けの情報交換を目的とした講座や、読み聞かせボランティア経験者向けのスキルアップ講座も実施しております。

なお、中央公民館の講座では、今年度も委員の皆さまに講師としてご協力いただいたものがたくさんございまして、「孫育て講座」では小屋委員、内田委員、「みんなでイベントを考え、作り、やってみよう」では小高委員、「観光ボランティアガイド入門講座」では三澤委員、「あつまろう！図書ボランティア」では秋山委員、「読み聞かせボランティアスキルアップ講座」では小屋委員と多くの方に講師を務めていただいております。改めて感謝申し上げます。

また、講座の一覧に記載はございませんが、今年度から中央公民館の講座申込みにつきましては、市の電子申請システムを利用して、申込フォームでの参加申込を受けはじめました。講座にもよりますが6～7割の方が申込フォームで申込いただいております。それ以外は電話やはがきという形になってはいますが、来年度以降は地区公民館での活用も検討していく予定です。中央公民館の事業の説明は以上となります。

続きまして、職員の研修体制の充実について4ページをご覧ください。「職員研修」として、地区公民館の館長、主事が参加をした研修会等を掲載しております。上から2つ目の枠にございますが、主事の研修といたしまして、意欲のある公民館主事が自主的に課題を設定し研究するという「公民館課題研究会」という研修を毎年行っております。今年度は4名の職員が参加し、研究活動を行いました。研究の成果につきましては、別紙で「高崎市公民館課題研究会報告書」をお配りしておりますので後ほどご覧ください。なお、今年度の研究テーマは「子どもを中心としたサードプレイスの機能研究」ということで、子どもを中心として世代間交流の促進を図る拠点としての公民館の活用を研究しました。実際に、金古南足門公民館でNPO法人や中学生、高校生、公民館利用団体と協力し、放課

後の子どもたちの居場所となるような「金古南さくら広場」という事業を実施し、検証を行いました。成果を実感する一方で、事業として継続するための課題等も挙げられております。また、5段目にございますが、社会教育主事講習につきまして、東、塚沢、金古南足門の3名の職員が研修を受講いたしました。現在、12の地区公民館に社会教育主事が配置されておりますが、今後もできるだけ多くの職員が講習を受講し、公民館に社会教育主事を配置できるよう取り組んで参ります。また、前回の審議会でも話ができましたが、今年度は関東甲信越静公民館研究集会新潟大会で群馬県を代表して久留馬公民館が事例発表を行いました。

続きまして、地区公民館の事業となります。5ページをご覧ください。12月末現在の集計で、44館で1,062講座が行われております。講座数はほぼコロナ前の水準まで回復いたしました。

「ライフアップ推進事業」は465講座、「キャリアデザイン支援事業」は388講座、「地域づくり支援・ボランティア養成事業」は82講座、共催事業が127講座実施されております。コロナの影響で回復が遅れていた、地域との連携で行うような講座の実施数も今年度は回復してまいりました。

6ページ以降は、実施した事業を様々なテーマごとにまとめたものです。こちらの資料も12月末現在の状況で、1～3月の事業については事業名の後ろに（予定）が入っております。また、複数の観点を含む事業が多いため、重複して記載しているものが多くございます。また、連携事業や特色のある事業を掲載しておりますので、各館のすべての事業が掲載されているわけではございませんので、ご承知おきください。すべての事業の一覧につきましては、毎年度作成しております「高崎市の公民館」の冊子に掲載されますので、来年度に配布させていただきますので、よろしくお願いいたします。

事業の中で新しいものを中心にいくつかご紹介させていただきます。

小学校との連携として7ページの久留馬公民館「ギガスクール端末で文化財巡り」は、前回の審議会の久留馬公民館の事例紹介でも触れましたが、高崎経済大生が地域の文化財マップをもとに紹介動画を作成し、小学生がギガスクール端末で見ることができるようにする事業です。マップ自体も、運営推進委員を中心にマップの作成をしましたが、そこから地域住民や小学生の史跡巡り、動画の作成と地域、小学校と連携したさまざまな事業に発展しています。また、上郊公民館の「工事現場で働く車を見学しよう」では、公民館に隣接する工場を建設中の企業と連携し、小学生が建設現場の見学会を行い、自分たちの地域を知る事業を行っております。

続きまして、中学・高校・大学等との連携について9ページをご覧ください。小学校以外との学校の連携事業ということで、引き続き館ごとにさまざまな学校との連携を図っておりますが、矢中公民館では新たに高崎健康福祉大学との連携

に取り組みました。

続きまして、生涯学習推進員との連携事業について、12ページからをご覧ください。各館で多様な事業が行われておりますが、引き続き、地域の歴史を知るための事業ですとかコンサートが、生涯学習推進委員と共催で行われております。また、12ページの佐野公民館の「災害時に備えた家庭備蓄と災害食実習」、14ページの寺尾公民館「地域のための防災講座」のように防災に関する連携事業も毎年いくつか行われております。

21ページからの関係団体との連携事業では、生涯学習推進委員や地域づくり活動協議会とかNPO以外の団体との連携事業ですが、各館で様々な団体等と連携を模索した事業が掲載されていますが、新しい事業では、例えば、21ページの南公民館「ポールウォーキング体験」では今年度群馬ヤクルトさんが「群馬県ポールウォーキング協会」を立ち上げ、そこと連携した事業として行っております。また、東部公民館「eスポーツ大会」では地区の育成会と連携し、若い世代にも公民館を利用して交流していただけるように行っています。23ページの岩鼻公民館「時短・簡単手づくり味噌教室」や、金古南足門公民館「男性料理教室」では地域の食生活改善推進員と連携した料理教室を行っています。コロナ禍で調理に関する教室が非常に行いにくく減っていましたが、今年度は新たな取り組みとしていくつか開催されております。

24ページからの行政機関・関係課との連携事業の中で、南公民館「美術館に行こう！」では、公民館と市の美術館が同じ建物に併設されているという特色を活かして、美術館の企画展に合わせて、展示鑑賞とテーマに応じたワークショップなどを同時に行う講座を、定期的に年4回行いました。地域住民に美術館と公民館を身近に感じてもらえるように、新たな取り組みとして行っております。

25ページの公民館サークルとの連携事業は、昨年度、前回の提言でサークルと連携した事業に取り組むようにという話があり、追加させていただきましたが、25ページの東公民館、26ページの寺尾公民館、城山公民館をはじめ、いくつかの館で新たにサークルに講師を依頼して講座を行う取組みを行っております。

続きまして、地域資源を活用した事業について31ページからをご覧ください。以前、審議会提言をいただいた地域資源の活用ということで引き続き取り組んでいますが、31ページの南公民館「昔の高崎を見てみよう！」という展示会や、32ページの矢中公民館「高崎五万石騒動について」、33ページの榛名公民館「身近な歴史に触れよう」をはじめとして、各地域で地域の歴史資源を改めて知るような講座に引き続き取り組んでおります。

続きまして、地域人材の発掘や育成に取り組んだ事業として35ページからをご覧ください。年々、地域人材の活用に対する意識が強くなっており、積極的に地域人材を活用した事業を行っていることから実施する館、講座数共に年々増

加しております。新規事業としましても36ページの佐野公民館「自分自身でやりたい、ゆかたの着付け」、東部公民館「クリスマスパンリース作り教室」、37ページ八幡公民館「初めての俳句教室」、38ページ滝川公民館「割り算の話」は、地域在住の大学の先生に数学の面白さを教わるというのですが、金古南足門公民館「終活講座」など、様々なジャンルで地域在住の方を発掘し、地域の学習活動につなげております。

続きまして、40ページからの居場所になるように行った事業ということで、これまで何度も紹介している部分もございますが、40ページの東公民館の「東ランチ」という、夏休みに公民館で、みんなで昼食をとって交流を図る事業や、42ページにある、前回審議会でも事例の紹介をしましたが、片岡公民館の「片岡ほっと！HOT！café」の定期的な交流のためのカフェの開催、今年度課題研究で行われた事業ですが、小学生の世代間交流を図る、金古南足門公民館「金古南さくら広場」のように、ここ数年で、まだ数件ではございますが、単純に講座を行うというのではなくて、公民館に居場所をつくることを意識した講座以外の取り組みも見られるようになりました。

若年層の参加促進に重点をおいた事業について43ページからをご覧ください。南公民館「心・身体・姿勢を整えるヨガ」、下里見公民館「シェフ中村のおいしく食べる夜会」、下里見公民館の館長が講師をして、料理を作って交流を図る講座ですとか、寺尾公民館「今こそヨガ」45ページの金古公民館「ベリーダンス&ヨガでシェイプアップ」など、いくつかの公民館で、夜間に開催して働いている現役世代の参加を目指す取り組みを行っております。例年に比べて、そうした取り組みが増えている傾向にございます。

50ページからの、動画配信やオンラインを活用した事業ということで、これまでもご紹介したことがございます久留馬公民館の「歌と音楽のチカラ」や、東公民館「クリスマス会」といった事業は継続して行っておりますが、コロナ禍が終わりまして、と言いますか集える状況になる中で、オンラインを活用した新たな事業というのになかなか取り組めていないという状況でございます。23番のスマートフォン等の技術習得を目的とした事業につきましては、今年度は実施館数、講座数ともに減少傾向にあります。昨年度から少し傾向がございましたが、スマホ入門といった一般的な初心者向けの講座のニーズがやや落ち着き、講座を実施しても参加者がそれほど集まらないというケースが増えております。例えば、51ページの矢中公民館「スマホカメラの撮影レッスン」、豊岡公民館「スマホでお買い物 キャッシュレス決済を体験しよう」といった、スマホの講座と言っても特定のテーマに絞った講座が増えております。

事業の紹介は以上とさせていただきます、事業については、この後も項目ごとに62ページまで記載されております。中には、上手くいった事業・手応えのあ

った事業ですとか、57ページの検討を要する事業、良いと思って実施したが参加者が集まらなかった事業もいくつか掲載されております。

62ページ以降は、事業以外の公民館の施設等の工夫について記載されています。各館が引き続き地域情報の掲載や読みやすい公民館だよりづくりに取り組んでおります。

64ページ図書室の活用についての工夫では、引き続き各館で展示の工夫ですとか貸出時間の工夫、図書室の他の用途への部屋の活用などを行っております。南公民館や矢中公民館のように今年度大規模な蔵書整理を行い、利用しやすい図書室づくりに取り組んでいるという状況もございます。

また、学習情報の収集や館内の掲示、展示の工夫については、わかりやすいチラシやポスター等の掲示を工夫している館が多くあります。

69ページからの気軽に集える場所となるようなロビー等についての工夫については、ご存じの通り殆どの地区公民館では空間的にロビーに集えるようなスペースを作ることが難しい館が多い状況ですが、新高尾公民館や北部公民館など、館内の整理等を行い、気軽に利用できるようなスペースを少しでも作ろうという工夫をしている館がございます。

その他、イメージ向上のための施設の工夫や備品の管理・活用についての工夫がそれぞれ掲載されております。

以上、取り組みについてご紹介をさせていただきました。時間の都合上もあり、本当に一部の少し特徴的な部分のみをご説明させていただきましたが、各館におきまして、今年度も様々な工夫、取り組みをして参りました。ぜひ、目次でテーマごとにも探せますので、他の項目の気になった部分についても後ほどご覧いただきますようお願いいたします。事業報告は以上で説明を終わらせていただきます。よろしく願いいたします。

会長： 今、事務局より構想に基づいた中央公民館、さらには地区公民館の特色ある取組みに視点を当てた実績の報告がありました。とりわけ、中央公民館では電子受付での申込みが6割か7割ということ、夜間講座の工夫をし始めたとか、スマホについては講座の内容を変えるといいということが、私の中にはキーワードとして残りました。いずれにしても、市内の公民館を詳細に把握して、その特色にフォーカスした実践をご説明いただいたのかなと思います。これについて皆さんからご意見、ご質問がありましたらお願いいたします。

今、膨大な資料の実践を見て意見もなかなか出しにくいと思いますので、これにつきまして何かございましたら、また事務局の方へということでもよろしいでしょうか。そういうことで、事業実績については以上といたします。ありがとうございました。

3 提言に関わる事例の紹介

会長： 続きまして、提言に関わる事例の紹介についてです。

本日、提言を提出しましたが、その中で参考事例として掲載した2つの事業について、委員の皆さまの参考となるよう、地区公民館の職員より取組みの内容を紹介していただきます。その一つが、佐野公民館の「いまを楽しんで♪自然な笑顔あふれる親子じかん」、二つ目が下里見公民館の「下里見チョイ to 助け隊」です。佐野公民館の主事と、下里見公民館の主事、紹介をお願いします。

佐野公民館主事： 佐野公民館主事です。よろしくお願いたします。提言書に事例として挙げられたものにつきまして、説明させていただきます。細かいことは本日配布の資料をご覧ください。参考事例として取り上げていただいた「いまを楽しんで♪自然な笑顔あふれる親子じかん」は、親子の居場所づくりを意識したNPO法人高崎子ども劇場、以後「子ども劇場」と言いますが、と連携した取り組みです。今、スライドに2つの場面を映していますが、自宅でやれば片付けが大変で、かえって親のストレスが溜まるような、大型ダンボールをいくつも繋いだトンネルを作って子どもや親がくぐったり、大量の新聞をちぎって目いっぱいまき散したり、新聞をたくさん積み重ねて布団に見立て、子どもが寝たりといった、親子が安心してゆるーく過ごす時間づくりを意識したことが、参加者のよい反応につながりました。後ほどこの「意識した点」について触れます。

講座タイトルを「親子じかん」と略しますが、この取り組みの源流は、コロナ禍前の2018年、同じ子ども劇場の佐野小学校区在住の2人のスタッフが中心となって始めた「佐野あそびや」という活動です。私どもと目的達成のために必要な手法を相談しながら、小学校区という地域の中で遊びをとおして、子どもと大人が関わり合う時間づくりを目指しました。

コロナ禍を経て、結果的に今現在は子どもの居場所づくりの活動になっており、毎週水曜日の夕方1時間を、スライド左側部分が時間中の1コマですが、スタッフが何かをやろうと投げかけなくとも、子どもたちが時間になれば、それぞれ主体的に、やりたいことを1時間やって過ごしています。

夏休みなど長期休暇は活動しませんので、この期間に「佐野あそびや」の活動の周知も兼ねて、公民館主催事業に組み込んできました。スライド右側が一つの事例ですが、これはあらかじめ提示した4種類程度の遊びのゲームからやりたいものを選択してもらい、ゲーム屋の店長に扮して、それぞれのチームで2日間をかけて、初日は開店準備を行い、2日目はチケットを配ったりして開店してお客さんに遊んでもらうという内容で、子ども、あるいは親子の居場所づくりを意識しています。ここでも子どもたちや親が主体的に行動できるよう、子ども劇場の

お力添えをいただいています。

「親子じかん」に話を戻します。子ども劇場との連携の中で「ゆるーく過ごす時間を意識した点」ですが、先ほど以来登場する2人のスタッフを通じて子ども劇場に事業への協力を仰ぎましたが、話が保留のまま、2人には何かためらう様子を感じました。

詳しく事情を聞きますと、法人のスタッフ全体会議にて公民館からの依頼を議題として持ち出したところ、これまで活動として何らかの形で子育て支援のような事業に取り組んだことはある。しかし、市の地区公民館からの依頼は初めてだし、1コマ2時間をお願いしたものですから、どれだけ濃い中身を作れるか不安だ、自信がないということでした。

私共にとって予想しない反応でしたので、改めて、何か目新しいことを行うことを求めたり、パッケージ化されたメニューを提供することは考えておらず、親子が安心して公民館にいる時間づくりのために、子ども劇場さんのお手持ちのノウハウの引き出しを整理する気持ちで、使えるものを出して欲しい、ということを経験してお伝えしました。

その後、返事にお時間を頂きましたが「100パーセントきっちりしたものを用意しなくともよい、だったらあえてゆるーくやろうよ」という意見にまとまったようで、協力を快諾していただきました。

この点は、子ども劇場の活動にとって新たな気付きになったようです。気付きという点で、この「親子じかん」関連の事業において、昨年度から当公民館に限った話として、1歳以上とりわけ3歳～未就学の子どもとその親の居場所づくりにつながる事業を企画しても、申し込みの反応が悪くなっていることです。

要因を探るべく当公民館利用サークルで親子リトミックの活動で来館する若い世代の保護者たちに話を聞いてみますと、多かったのが「子どもが私立幼稚園に通っているが、幼稚園のお迎えに支障がない範囲でパートタイムの仕事を始めた。幼稚園の夏休みも預かり保育で登園させるので、午前中の公民館事業には参加できない。仮に登園しなくても子どものおじいちゃん・おばあちゃんの家で預けて仕事に出かけている。」という現状です。

この他、早々にフルタイムの仕事に復帰するので、子どもは保育園に入園するから、今後は平日に公民館に行けないといった声もありました。ライフスタイルやキャリアデザインが多様化している中で単純に開催曜日・時間を変えればいいというものでもありませんので、今後の子育て支援事業の方向性を関係者と熟慮しているところです。

まとめていきますが、佐野小学校区の人口は約17,600人と人口が多いことや、公民館の対象地域が小学校区なので、地域住民のみなさんとの距離が近い、これらのことから地域人材との出会いや情報収集が期待できるという環境を活

かし、公民館として、地域人材との連携に力を入れた取り組みを行ってきた次第です。

地域人材との連携はあくまで手段の一つで、雑誌への寄稿のとおり、連携を通して公民館というステージで地域住民の皆様にも事業のみならず様々な面から還元していくことで、公民館で地域住民が関わり合い、新たな学びが創造されることで、地域住民の居場所となる、また地域課題解決の気付きの原動力が生まれるというふうを考えております。

コロナ禍の息苦しさゆえ公民館が心のガス抜きという機能を持ったかもしれません。公民館が、用事が無くても気軽に出入りできる「居場所の選択肢」に入るよう、今後とも公民館の価値を高めて、地域住民の皆さんにとって「主体的に活動し、安心して暮らすことができる地域のための公民館」の創造を旨としていく所存です。ご清聴ありがとうございました。

事務局： 続けて、下里見公民館の「下里見チョイ to 助け隊」の事例について話をさせていただきます。こちらは、資料はございませんので画面をご覧ください。

下里見公民館主事： 運営審議委員の皆様、こんにちは。私は下里見公民館の主事です。

これから下里見公民館ボランティアチーム「下里見チョイ to 助け隊」を紹介いたします。まず画面を見て「黄色の目隠し部分」に気付いてもらえたかと思います。約1年半前の令和5年8月に当館で開催された審議会の事例発表でも紹介しましたが、私はサブタイトルをつけることに並々ならぬ情熱を注いでいます。

そして今回の「お助け隊」を端的に表すサブタイトルがこちらです。

「NO無理」で「ゆる～くなが～く」です。

まず、「下里見チョイ to 助け隊」(通称:「お助け隊」)の概要を説明します。「お助け隊」は私が令和4年度の公民館課題研究会に参加し、その活動の中から生まれた「公民館ボランティアチーム」です。メンバーは公民館にとって1番身近な存在である利用者などで構成されており、現在、利用者の有志4名と図書ボランティア4名の計8名で活動しています。主に、職員だけでは人手が不足しがちな、参加人数の多い講座の運営サポートをお願いしています。

「お助け隊」発足の経緯です。私が参加した令和4年度課題研究のテーマは「公民館と住民・地域との新たな関係づくり」でした。

まず、当館の状況を他館と比較したところ、下里見は他の外部団体との共催事業が少なく、生涯学習推進員と年1回、1事業を行っているのみでした。

そこで、新たな関係づくり＝他の公民館で例のある「地域づくり活動協議会や区長会などとの連携」と、短絡的に考えたのですが、そこには大きな壁が存在しました。

大きな壁は3つ。「地域性」「時代の変化」「主事の経験」です。それぞれの壁を詳しく見ていきましょう。

まずは「地域性」です。当館は平成24年度に開館した新しい公民館です。

開館から昨年度まで12年間在任した館長によると、当初より区長会などの団体とは、お互い適度な距離を保つことを申し合わせていたので、「今から新しく何かを一緒にやる」というのは難しいのではないかとのことでした。

また、これはあくまでも個人の推測の域を出ませんが、歴史のある公民館は、公民館と地域が足並みを揃えて持ちつ持たれつでコミュニティを形成してきましたが、当館は、地域コミュニティがある程度完成している中に後から参入したため、協働とはなりにくいのではないのでしょうか。第1の壁は新しい公民館故の「地域の特色による壁」です。

次に「時代の変化」です。近年は情報機器の目覚ましい発達により、ひと昔前ほど、地域に顔を出さなくてもコミュニケーションや情報が得られるようになりました。

また、少子高齢化などの社会変化に伴い、地縁的な繋がりや地域コミュニティが弱体化したこともあり、地域活動よりもプライベートを優先する人も多くなってきています。子ども育成会やPTAの解散などは、この傾向を象徴するものではないのでしょうか。

区長や区長代理などの地域の役員を新しく引き受けてくれる人が見つからず、何期も同じ人がやらざるを得ない、空席が生じている、1人の人が何役も兼務している、なんてことは近年、耳にする話です。

地域に必要不可欠な役ですら見つけられない現状がある。第2の壁は「協力者のなり手不足による壁」です。

最後は「主事の経験」です。私は令和4年度に公民館に配属となり、課題研究に参加した時は経験0の新米主事。前任者からは事務引継ぎの際、「あなたのやりたいように自由に事業計画をしてください。」と言われましたが、分からないことが多すぎて、何から手をつけたら良いのかも分からない。挙句の果てに、上司に誘われるがまま、分からないが故に課題研究に手を挙げてしまった。

今となっては良い経験だったと思えていますが、あの時は「自分の首を自分で絞めてしまった」と切実に感じました。第3の壁は「主事の経験不足による壁」です。

以上、3つの大きな壁に直面したわけですが、公民館主事としては、「住民・地域との新たな関係づくり」に奔走して、これらの地域課題を解決しました、と発表できれば格好良かったのですが、やはり自分の身の丈以上の「無理」は後で祟ります。これは主事だけではなく、地域にとっても然りです。

折角、新しいことを始めたとしても、その主事が異動すると終わってしまう。

また、地域としても時を重ねるごとに疲弊してしまい、続けられなくなる。これでは意味がありません。そこで目指したのはこちらです。

「NO無理(身の丈)」で「ゆる～くなが～く(出来る範囲のことを継続して)」それが「お助け隊」です。

「下里見チョイ to 助け隊」という名前には、「無理がない範囲でちょっとだけ公民館を助けてあげたい」というメンバー目線の思い、そして「肩肘張らずに、ちょっとでも良いから助けてもらいたい」という公民館目線の思いも込めました。

さらに、誰にとっても親しみがもて、目を惹く遊び心のある名前を目指し、漢字・カタカナ・平仮名・ローマ字を取って混在させました。

令和4年10月、「お助け隊」は結成後、初のミーティングを行いました。写真はその時の様子ですが、その名前を象徴するかのように当時の館長からメンバーに伝えられた活動方針がこちらです。

「気楽に」「楽しく」「手伝える時に」

そして初ミーティングの2カ月後の12月、「お助け隊」は「初心者グラウンドゴルフ大会～目指せ！下里見公民館杯～」で初めて活動を行いました。実施場所が公民館外ということもあり、私1人では会場設営、スコア集計、表彰式と手一杯でしたが、お助け隊が随所でサポートをしてくれたことで大盛況に終わりました。

ちなみに「気楽に」「楽しく」「手伝える時に」がモットーですので、メンバーは大会に参加し、ゲームを楽しみながらのお手伝いであったことを申し添えておきます。

そして、最近の活動の様子がこちらです。主に夏休みの子ども向け講座のサポートメンバーとして加わってもらっています。特に低学年は親の同伴を条件とする講座もあり、結成前は同伴ができず参加できなかった児童が、お助け隊のサポートにより参加できるようになりました。また、メンバー自身も久しぶりに若い力に触れられ、元気をもらえたとの感想をもらっています。

最後に「お助け隊」の今後の目標ですが、やはり「チームの存続と活動の継続」に尽きると考えています。これまで紹介したように「お助け隊」は、公民館・利用者さらにはメンバーにとっても「ウィンウィン」の関係で活動できています。

しかし、近い将来、主事の異動があったり、現メンバーが交代しなければならない時期も来ます。人が変わったら終わってしまった。この点では「NO無理(身の丈で主事もメンバーも無理をせず)」「ゆる～く(出来る範囲のことを)」で活動する「お助け隊」は、人の入替があったとしても「なが～く」継続できるはずで

す。

結成当時の館長が初ミーティングで何気なく伝えた「気楽に」「楽しく」「手伝える時に」という言葉は、メンバーだけでなく経験の浅い主事にとっても「お助

け隊」を「ちょっと長く続けてみたい」と思える合言葉になっています。
ご清聴ありがとうございました。

会長： 今、佐野、下里見公民館の事例発表がありました。何かこの発表に関わって、ご質問、ご意見がありますでしょうか。

無いようですので、また質問等ありましたら、後日でも結構ですので、直接連絡していただければと思います。

それでは事例紹介につきましては、以上とさせていただきます。

今日の議事進行の中に、最後ですので何か挨拶を入れるとありますので、一言ご挨拶させていただきます。

先程提言書をお渡ししました。その中で館長から今回の提言についてのお話があったと思います。私からは、そのことについてです。諮問を受けての答申ではありませんでした。そんな事情から、私の隣に座っております副委員長が資料を基に原案を作成するのですが、さらには提案するという、そこに並々ならぬ経験が活かされておりました、ということが一つです。専門委員会の皆さんについて、その原案を検討するわけですが、実には的確でポイントをついた観点から発言をいただきました。そして、各運営委員の皆様からそれぞれの得意分野からのご指摘、充実に向けた内容の発言をいただきました。非常に協議が盛り上がり、その証が今回の提言書となっております。そんなことも一言付け加えさせていただきます。

もう一つですが、ここにいる方もいらっしゃると思いますが、いわゆる地区公民館の館長、さらには主事にアンケート依頼しました。そうしたらその中身がお見事で、非常にコロナ禍の3年間における包括された実態が、的確にこちらに伝わってきた内容でした。そうした内容を大切にしながら、副委員長を中心として纏めていただいたわけです。そのようなチーム力というのですか、簡単なようで難しいのですが、そのようなことで、この提言がまとまりましたというところを、メッセージとして送りまして、私からの感謝の気持ちとして伝えさせていただきます、議長を降りさせていただきます。

皆様には大変お世話になりましたと、心よりお話をさせていただきます。ありがとうございました。

司会を事務局にお戻しします。

報告・連絡事項

事務局： 前回審議会の会議録及び議事録について

閉会

事務局： 以上で、第7回 高崎市公民館運営審議会を終了させていただきます。皆様、

お疲れさまでした。ありがとうございました。